

『中央学術研究所紀要』第49号抜刷  
令和2年11月15日発行

## 梵文法華経における *prajñā*

西 康 友

# 梵文法華經における *prajñā*

西 康 友

はじめに

1. 徳相としての *prajñā*
2. ブツダのさとりを得るための思惟（六波羅蜜の一つ）としての *prajñā*
3. 如来・ブツダの知としての *prajñā*
4. 神通としての *prajñā*

おわりに

梵文法華經写本一覧（書写年代・略号・出土地・所蔵場所）

出典・参考文献

## はじめに

初期大乘仏典を代表する法華經は、梵文法華經（SP）の漢訳とされる鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』[406年]（妙法華）の出現によって、東アジアの多くの地域に伝承・受容され展開した。特に日本では仏教公伝[538年]以来、法華經が多くの伝統仏教・新宗教教団の所依經典に位置付けられた。このため法華研究が膨大になされてきたが<sup>1</sup>、現存する SP 写本の語彙・語形・語法・書写法・韻律等の研究において、総合的な精査が不十分なため、多くの未解決問題が存在する。これらの一つに、SP写本と妙法華対照箇所語彙に齟齬が散見される問題がある<sup>2</sup>。

本稿ではこの2つの經典に存在する対照箇所齟齬のうち、*prajñā*に着目する。

*prajñā* における研究については、バウツダコーシャ研究会「*prajñā* / *paññā* の訳語をめぐって」<sup>3</sup>や仏典を鳥瞰した論考<sup>4</sup>などがあり、妙法華における「智慧」研究は数多

<sup>1</sup> 最近、1844-2020年(4月)までの法華研究の論文・学術図書などを網羅した Mochizuki and Kim [2020] が出版された。

<sup>2</sup> Nishi[2016]では、SPにおける *upāyakaśalya* と妙法華の相当対応箇所（「方便」）について論じた。

<sup>3</sup> 『仏教文化研究論集』第18・19号（特別号）[2017]。このほかにも橋本[2007]が『スッタ・ニパータ』における *prajñā* の訳語を「『智慧』ではなく『追い求めること』と訳すべき」と結論づけており、法華經における根源的概念（西[2011]）の論旨につながる可能性が期待できる。

<sup>4</sup> 高崎[2000]など。

くあるものの、管見ではこれを含めた SP における *prajñā* の用例研究がほとんど議論されていないように思われる。

以上の観点から、本稿では現存するすべての SP 写本における *prajñā* とこれらの妙法華の対照箇所について精査し、議論する。

SP写本は67種類が現存する。本発表で用いる写本は欠損など不明な箇所は除き、すべての当該箇所を参照した。SP 写本は中央アジア（Central Asia：CA）伝本とギルギット・ネパール（Gilgit-Nepal：G-N）伝本の2伝本に大別できるため、CA 伝本にはカシュガル本（O<sup>5</sup>）とそのローマ字本（Th<sup>6</sup>）を、G-N 本には SP 研究の基準テキスト（『ケルン・南條校訂本』KN<sup>7</sup>）により、それぞれの伝本を代表させた。写本間で読みの異なる語彙（異読）がある場合には、当該箇所に注を付加し明示した。また妙法華の底本は未だ不明だが<sup>8</sup>、訳出年が406年であること、現存最古 SP とされる写本（旅順本Lü）でも書写年代が5世紀半ばであること、妙法華が現代に最も多く流布している漢訳法華経であることから、本稿の当該対照箇所として明示することとした。

SP（O(Th)とKN）における *prajñā*、および妙法華の対照箇所は、表1のように52箇所に出現する<sup>9</sup>。SP における *prajñā* と妙法華を精査した結果、これらの用例は以下の4つに分類できる：

- ① 徳相としての *prajñā*
- ② ブツダのさとりを得るための思惟（六波羅蜜の一つ）としての *prajñā*
- ③ 如来・ブツダの知としての *prajñā*
- ④ 神通としての *prajñā*

この分類を表にまとめると以下ようになる。

表1 SP（O(Th)／KN）における *prajñā* と『妙法蓮華経』の漢訳対照箇所  
（※（ ）数字は用例番号、KN の [ ] 数字は SP の章を示す）

	O(Th)		KN		『妙法蓮華経』	①	②	③	④
(1)	<i>svimuktaprajñair</i>	6b7	<i>svimuktaprajñair</i>	[1]1.7	-----		○		
(2)	<i>mahāprajñaiḥ</i>	8b1	<i>mahāprajñaiḥ</i>	[1]3.2	佛慧	2a06	○	○	
(3)	<i>prajñāpāramitāgatim-gataiḥ</i>	8b1	<i>prajñāpāramitāgatim-gatair</i>	[1]3.2	通達大智 到於彼岸	2a06	○	○	
(4)	<i>prajñāya</i>	21a1	<i>prajñāya</i>	[1]14.6	以此妙慧	3b19		○	
(5)	<i>prajñayā</i>	39b3	<i>prajñayā</i>	[2]32.10	以妙智	6a14		○	

<sup>5</sup> Kashgar Manuscript.

<sup>6</sup> Ed. Toda, H. 1983. *Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Central Asian Manuscripts. Romanized Text.* Tokushima.

<sup>7</sup> Ed. Kern, H. and Nanjio, B. 1908–1912. *Saddharmapuṇḍarīka, Bibliotheca Buddhica X.* St. Pétersbourg.

<sup>8</sup> この研究の取り組みについては、西 [2020]（本紀要）を参照されたい。

<sup>9</sup> Nishi[2019].

(6)	<i>prajñayā</i>	39b4	-----	[2]32.11	佛智	6a15		○		
(7)	<i>prajñāvantaś</i>	43a3	prajñāvanti	[2]36.7	智慧	6c11	○			
(8)	<i>prajñāya</i>	56b5	prajñāya	[2]49.13	智	8c13		○		
(9)	<i>prajñāya</i>	60b1	prajñāya	[2]54.7	慧	9b26	○			
(10)	<i>prajñā</i>	63b4	pradhānā	[2]58.10	妙法	10b8	○	○		
(11)	<i>prajñayā</i>	124a2	samyakprajñayā	[5]123.4	知	19b13			○	
(12)	<i>tathāgataprajñayā</i>	131a7	-----	[5]132.1	-----				○	
(13)	<i>prajñā</i>	134a4	prajñā	[5]134.14	-----			○	○	
(14)	<i>alpaprajñō</i>	135a3	alpaprajñō	[5]135.12	-----			○		
(15)	<i>ṛddhīm</i>	134b4	prajñām	[5]135.6	-----		○	○		○
(16)	<i>prajñācakṣuṣā</i>	135b3	prajñācakṣuṣā	[5]136.5	-----				○	
(17)	<i>alpaprajñāḥ</i>	135b5	alpaprajñāḥ	[5]136.7	-----			○		
(18)	<i>prajñāmadhyardhy- avasthānā(t)</i>	137b5	prajñā- madhyavyavasthānāt	[5]138.15	-----			○		
(19)	<i>prajñābhā</i>	137a5	prajñā	[5]138.3	-----				○	
(20)	<i>madhyaprajñāya</i>	138b2	madhyaprajñāya	[5]140.5	-----			○		
(21)	<i>mahāprajñō</i>	140a2	mahāprajñō	[5]143.3	-----		○		○	
(22)	<i>prajñā</i>	170a6	caryāśuddhi- gatiprajñā	[7]177.3	智慧	24c11	○	○		
(23)	<i>prajñavanto</i>	176b7	prajñavanto	[7]183.5	智慧	25b11	○	○	○	
(24)	-----		prajñavantah	[8]202.6	智慧	27c26	○	○		
(25)	<i>prajñācaryāya</i>	207a4	-----	[9]218.10	-----			○		
(26)	<i>mahāprajñā</i>	253a7	prajñayā	[11]262.6	智徳	35b08	○			
(27)	<i>mahāprajñā</i>	251b7	mahāprajñā	[11]263.3	智慧	35b15	○			
(28)	<i>prameyaprajñā</i>	254a3	avivartyāprameya- prajñā	[11]264.8	-----		○	○		
(29)	-----		satprajñā	[13]281.2	-----			○		
(30)	-----		mahādusprajñajāṭiyā	[13]288.1	-----			○	○	
(31)	<i>prajñānirjitena</i>	277a2	-----	[13]289.13	智慧力	39a01	○		○	
(32)	<i>jñāna- prabhūtakōśaḥ</i>	280a4	prajñā- prabhūtakōśaḥ	[13]292.7	智慧寶藏	39b03	○		○	
(33)	<i>(prajñāś)</i>	291b7	-----	[13]303.5	智慧	40b25	○			
(34)	<i>prajñavanto</i>	292a1	-----	[13]303.7	-----		○	○		
(35)	<i>mahāprajñā(h)</i>	293a1	mahāprajñāḥ	[14]305.6	-----			○		
(36)	<i>mahāprajñā</i>	293b2	mahāprajñā	[14]306.6	大智力	40c22	○			○
(37)	<i>prajñāya</i>	297a7	prajñāya	[14]309.15	智慧	41b12		○		○
(38)	<i>(prajñābalasmi(m))</i>	297b6	prajñābalasmin	[14]310.7	-----			○		
(39)	<i>prajñāya</i>	301b6	prajñāya	[14]313.12	-----			○		
(40)	<i>prajñāya</i>	301b7	prajñāya	[14]313.13	-----			○		
(41)	<i>prajñabale</i>	301a5	prajñabale	[14]313.2	-----			○		○
(42)	<i>prajñāpāra(mit)āyām</i>	321a4	prajñāpāramitayā	[16]333.1	般若 波羅蜜	44c23		○		
(43)	<i>prajñāyā</i>	327a4	prajñāyā	[16]339.10	智慧	45c14		○		
(44)	<i>prajñ(ā---)t</i>	328a3	-----	[16]339.17	智慧	45c23		○		

(45)	<i>prajñavanto</i>	330a3	prajñāvāṃś	[16]343.5	智慧	46b01	○			
(46)	<i>prajñāvān</i>	337b2	prajñāvān	[17]350.5	智慧	47a11	○			
(47)	-----		prajñābalasthāmaṃ	[19]380.13	-----		○	○		○
(48)	-----		prajñayā	[22]420.7	智慧	54c14	○	○		
(49)	<i>prajñāyā</i>	418b4	prajñāhāniḥ	[23]434.8	智慧	56a29	○			○
(50)	<i>prajñalocanā</i>	430b2	prajñājñāna- viśiṣṭalocanā	[24]452.2	智慧觀	58a18	○			
(51)	-----		prajñāvantau	[25]457.10	智慧	59a05	○	○		○
(52)	<i>prajñāpāramitāyāṃ</i>	433a7	prajñāpāramitāyāṃ	[45]457.12	般若	59c06		○		

## 1. 徳相としての *prajñā*

如来・仏や菩薩等たちが身につけている徳の一つとして *prajñā* を与える用例がある。これらの用例は3つの場合が出現する：1) *prajñā* との複合語 (*bahuvrīhi*)；2) *prajñāvat* で与えられている；3) *prajñā* との並列用語。これらの用語の前後に同格の語彙があり、人物の徳相を表現するものとして *prajñā* が出現している。この同様な用例は29箇所に出現する。

以下では、これら3つの場合のいくつかの用例を挙げ、議論する。

### 1.1. *prajñā* との複合語 (*bahuvrīhi*) の場合

用例(1) **O(Th)** 6b7 *svimuktaprajñair* : **KN**[1]1.7 *svimuktaprajñair*

**O(Th)** <sup>[6b]</sup> *dvādaśabhir mahāśrāvakaśahasraiḥ sarvair arhadbhiḥ kṣīṇā-<sup>[7]</sup>sravaiḥ niḥkleśaiḥ vaśī-bhūtaiḥ svimuktacittaiḥ svimuktaprajñair ājāneyair mahānā-<sup>[7a1]</sup>gaiḥ kṛtakṛtyaiḥ kṛtakaraṇīyai-r apahr̥tabhāraiḥ anuprāptasvakārthaiḥ parikṣiṇabha-<sup>[2]</sup>vasaṃyojanaiḥ samyagājñāsvimuktacittaiḥ sarvacetovaśitāparamapāramiprāptai-<sup>[3]</sup>r abhijñānābhijñātaiḥ sthvirair mahāśrāvakaiḥ*

一万二千人の大声聞たちすべてが、阿羅漢 (*arhadbhiḥ*) で、漏が尽き (*\*kṣīṇāsravair*)、苦から離れ (*\*niḥkleśair*)、自制者となっていて (*\*vaśībhūtaiḥ*)、見事に解脱し (*svimuktacittaiḥ*)、見事に解脱した *prajñā* を備え (*svimuktaprajñair*)、高貴な生まれで (*ājāneyair*)、偉大な象 (のよう) で (*mahānāgaiḥ*)、義務をなし終え (*kṛtakṛtyaiḥ*)、なすべきことをなし終え (*\*kṛtakaraṇīyaiḥ*)、重荷をおろし (*apahr̥tabhāraiḥ*)、自己の目的に到達し (*anuprāptasvakārthaiḥ*)、生存の結びつきが消滅し (*parikṣiṇabhavasamyojanaiḥ*)、心が見事に解脱した正しい知を備え (*samyagājñāsvimuktacittaiḥ*)、すべての心の苦から離れた最高の極致を獲得し (*sarvacetovaśitāparamapāramiprāptair*)、超自然的な知でよく知られ (*\*abhijñānābhijñātaiḥ*)、堅固で (*sthvirair*)、大声聞たちである [(を伴っていた)]。

**KN** <sup>[1.6]</sup> *dvādaśabhir bhikṣuśataiḥ sarvair arhadbhiḥ kṣīṇāsravair niḥkleśair vaśībhūtaiḥ svi-<sup>[7]</sup>muktacittaiḥ svimuktaprajñair<sup>10</sup> ājāneyair mahānāgaiḥ kṛtakṛtyaiḥ kṛtakaraṇīyaiḥ*

apahr̥tabhārair anuprāpta-<sup>[8]</sup>svakārthaiḥ parikṣīṇabhavasamyojanaiḥ samyagājñānsuvimuktacittaiḥ sarvacetovaśītā-paramapāramitā-<sup>[9]</sup>prāptair abhijñānābhijñātair mahāsrāvakaiḥ |

千二百人の比丘たちすべてが、阿羅漢で、漏が尽き、苦から離れ、自制者となっていて、見事に解脱し、見事に解脱した *prajñā* を備え、高貴な生まれで、偉大な象（のよう）で、義務をなし終え、なすべきことをなし終え、重荷をおろし、自己の目的に到達し、生存の結びつきが消滅し、心が見事に解脱した正しい知を備え、すべての心の苦から離れた最高の極致を獲得し、超自然的な知でよく知られた、偉大な声聞たち [(を伴っていた)]。

【妙法華】<sup>[10]</sup> 與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏<sup>[21]</sup>已盡。無復煩惱。逮得己利盡諸有結。心得<sup>[22]</sup>自在。

KN では *arhat, kṣīṇāsrava, niḥkleśa, vaśībhūta, suvimuktacittaiḥ, ājāneya, mahānāga, kṛtakṛtya, kṛtakaraṇīya, apahr̥tabhāra, anuprāptasvakārtha, parikṣīṇabhavasamyojana, samyagājñā-suvimuktacitta, sarvacetovaśītāparamapāramitāprāpta, abhijñānābhijñāta* が *suvimuktaprajñā*<sup>11</sup> と同格である。すなわち *suvimuktaprajñā* の用語が、この内容を修飾し、同等の意味を与えている。妙法華には当該箇所に対応する漢訳語がない。以下にこの場合に適合する同格の用語を列挙する（なお ( ) 内数字は表 1 にある用例番号である）：

用例(2) *mahāprajñā*- (偉大な *prajñā* を備えた) と同格： *āvaruptakuśalamūla*- ([ブツダたちのもとで] 善根を植えた)、 *saṃstuta*- ([ブツダたちに] 賞賛された)、 *maitrīparibhāvitaḥyacitta*- (慈しみに溢れた身体と心を備え)、 *tathāgatajñānāvātāraṇakuśala*- (如来の知に入らせるのに巧みな)、用例(3) *prajñāpāramitāgatiṃgata*- (*prajñā* の極致を体得した)。

用例(27) *mahāprajñā*- と同格： *tikṣṇendriyā*- (鋭敏な感覚器官をもった)、 *jñānapūrvamgamena kāyavañ manaskarmaṇā samanvāgatā*- (備えられた知によって身体・心の行為の準備をもった)、 *sarvathāgatabhāṣitavyañjanārthodgrahāṇe dhāraṇīpratīlabdhā sarvadharmasattvasamādhānasamādhisahasraikaṣaṇapratīlābhin*- (すべてのものごとと生きとし生けるものに集中する何千の三昧を一瞬のうちに獲得することを備えた)

用例(35) *mahāprajñā*- と同格： *gaṇanāvyativṛtta*- (集団の計算をはるかに超越した)

用例(36) *mahāprajñā*- と同格： *ṛddhimat*- 「神通を備えた」、 *vicakṣaṇa*- ([ものごとに] 精通した)

<sup>10</sup> *suvimuktaprajñā* は O(Th) と KN 対応箇所と一致し、この対応箇所の現存する他 SP 写本はすべて *suvimuktaprajñā*, m.pl.instr. と読み、異読は存在しない。

<sup>11</sup> O(Th) には *sthavira* (堅固) が付加されている。G-N 伝本の当該箇所には *sthavira* と読む写本が存在しない。O(Th) 以外の CA 伝本が欠損しており、当該箇所が G-N 伝本に存在しない CA 伝本の特有な異読なのかは不明である。

1.2. *prajñāvat* で与えられている場合

この場合の *prajñā* は 4 対応箇所<sup>12</sup>を含む11箇所に出現する。いくつかの例を以下に示す：

用例(7) O(Th) 43a3 *prajñāvantas* : KN[2]36.7 *prajñāvanti*

O(Th) <sup>[42b7]</sup> *santi* : || <sup>[43a1]</sup> *khalu bhagavāṃ tasyāṃ parṣadi bahūni prāṇasātāni · bahūni prānasahasrāṇi bahūni* <sup>[2]</sup> *prāṇasatasahasrāṇi bahūni prāṇakoṭinayutaśatasahasrāṇi ye pūrva-buddhadarśāvina ·* <sup>[3]</sup> *prajñāvantas te bhagavato bhāṣitam abhiśraddadhāsyanti ·*

世尊よ、この集会には、何百の生命たち (*prāṇasātāni*)、何千の生命たち (*prānasahasrāṇi*)、何万の生命たち (*prānasahasrāṇi*)、何千万×何万×百×千の生命たち (*prānasahasrāṇi*) がいる。*prajñā* を備えた彼らは、かつてブツダに会っていて、世尊のことばに対して信じるであろう (*abhiśraddadhāsyanti*) 人たちである。

KN <sup>[36.5]</sup> *santi bhagavaṃs tasyāṃ parṣadi bahūni prāṇisātāni bahūni* <sup>[6]</sup> *prāṇisahasrāṇi bahūni prāṇisatasahasrāṇi bahūni prāṇikoṭinayutaśatasahasrāṇi pūrva-* <sup>[7]</sup> *buddhadarśāvīni prajñāvanti* <sup>[3]</sup> *yāni bhagavato bhāṣitam śraddhāsyanti pratīṣyanti udgrahīsyanti ||*

世尊よ、この集会には、何百の生命あるものたち (*prāṇisātāni*)、何千の生命あるものたち、何十万の生命あるものたち、何千万×何万×千の生命あるものたちがいる。

*prajñā* を備えた彼らは、かつてブツダに会っていて、世尊のことばを信じ (*śraddhāsyanti*)、信頼し (*pratīṣyanti*)、保持するであろう (*udgrahīsyanti*) 人たちである。

【妙法華】 <sup>[6c10]</sup> 是會無數百千萬億阿僧祇衆生。<sup>[11]</sup> 曾見諸佛。諸根猛利智慧明了。<sup>[12]</sup> 聞佛所説則能敬信。

上記や同様の用例に(23)、(45)、(46)があるが、いずれも *prajñāvat* 「*prajñā* を備えている」と与えられるだけで、この用語と同格の用語がなく、*prajñāvat* の語義が示されていない。

また O(Th) か KN のいずれか一方の出現例<sup>14</sup>は以下である：

用例(24) O(Th) ----- : KN[8]202.6 *prajñāvantaḥ*

O(Th) <sup>[193a7]</sup> *sarve ca te satvā aupapādukā bhaviṣyanti brahmacā-* <sup>[193b1]</sup> *riṇo manomayebhir ātmabhāvebhiḥ svayamprabhāḥ satvā bhaviṣyanti ·* *ṛddhimanto vaihāya-* <sup>[2]</sup> *saṃgamāḥ satvā bhaviṣyanti*

そして、自然と生じた (*aupapādukā*) すべての生きとし生けるものたちは、梵行の (*brahmacāriṇo*) 心と (*manomayebhir*) 身体から成り (*ātmabhāvebhiḥ*)、自らの光をもつ (*svayamprabhāḥ*) 生きとし生けるものたちとなるであろう。神通を備え (*ṛddhimanto*)、空中を行き来する (*vaihāyasamgamāḥ*) 生きとし生けるものたちとなる

<sup>12</sup> このほかにこれと同様な用例に(23)、(45)、(46)がある。

<sup>13</sup> 他の写本の異読は *prajñāvantas* か *prajñāvanti* だけである。

<sup>14</sup> これと同様な他の用例に(44)がある。



であろう (*°bhaviṣyant*)。

**KN** <sup>[202.5]</sup> sarve ca te sattvā aupapādukā bhaviṣyanti brahmacā-<sup>[6]</sup>riṇo manomayair ātmabhāvaiḥ svayaṃprabhā rddhimanto vaihāyasamgamā vīryavantaḥ smṛtivantaḥ **prajñāvantaḥ** <sup>[7]</sup> suvarṇavarṇaiḥ samucchrayair dvātriṃśadbhir mahāpuruṣalakṣaṇaiḥ samalamkṛtavigrahāḥ |  
そして、自然と生じたすべての生きとし生けるものたちは、梵行の心と身体から成り、自らの光をもち、神通を備え、空中を行き来し、精進に励み (*vīryavantaḥ*)、思慮深く (*smṛtivantaḥ*)、**prajñā** を備え、金色の身体で三十二の偉大な人物の特徴で彩られると  
なるであろう (*samalamkṛtavigrahāḥ*)。

【妙法華】<sup>[27c.26]</sup>一切衆生皆以化生。無有姪欲得大神通。<sup>[27]</sup>身出光明飛行自在。志念堅固精進智慧。<sup>[28]</sup>普皆金色三十二相。而自莊嚴。

O(Th)にはKNの記述 *vīryavantaḥ smṛtivantaḥ prajñāvantaḥ suvarṇavarṇaiḥ samucchrayair dvātriṃśadbhir mahāpuruṣalakṣaṇaiḥ samalamkṛtavigrahāḥ* が存在しない。当該対応箇所にはCA伝本ではO(Th)以外の写本が現存せず、G-N伝本では現存のうちでより古い写本C5にKNと同様な記述が見られる。KNに従えば *prajñāvantaḥ* と *rddhimanto* が同格であることから、上記の用例(15)と同様に、伝承の過程でG-N伝本に上記のKNの記述 *prajñāvantaḥ* を含む語句が付加され、*prajñāvantaḥ* が *rddhimanto* と同価値をもつ意味で解釈されていた可能性がある。

同様な場合の用例(34)<sup>15</sup>では、CA伝本 (FB, O(Th)) *prajñavat-*の当該対応箇所にはG-N伝本 (D1, C5) *smṛtimat-*とあり、伝承過程で *prajñavat-* が *smṛtimat-* (またはその逆) に解釈され、書き換えられた可能性がある。

### 1.3. *prajñā* と並列の用語がある場合

用例(9) **O(Th)** 60b1 *prajñāya* : **KN**[2]54.7 *prajñāya*

<sup>[59a.7]</sup> *ahaṃ pi paśyā-*<sup>[59b.1]</sup> *mi* : <sup>[60b.1]</sup> *dari(dra)satvān · prajñāya puṇyaiś ca vihīna bālā(h)*  
*praska*<sup>[ndha]</sup> *nda saṃsāri viruddha durge na mucyīṣu duḥkha-*<sup>[2]</sup> *paramparāyā · 74*  
(=110)

**KN** <sup>[54.7]</sup> *ahaṃ pi paśyāmi daridrasattvān prajñāya*<sup>16</sup> *puṇyehi ca viprahīnān |*

<sup>[8]</sup> *praskanda saṃsāri niruddha durge magnāḥ punaḥ duḥkhaparamparāsu ||110||*

私はまた、貧困な生きとし生けるものたちを見る。[彼らは] **prajñā** や福德 (*puṇyehi*) が消え失せ、輪廻をさまよい、悪い境遇に閉じ込められ、さらに苦の連続の中に沈ん

<sup>15</sup> 現存する他写本の異読は以下である：

CA 伝本には Lü <sup>[A12R.7]</sup> *kuta ime °kathaṃ vāpi āgacchanti ma(hi) |||* <sup>[8]</sup> *||| ṇa kuta eteṣa āgatam\* prajñāvantaḥ*; FB <sup>[31b.3]</sup> *smṛtimanta ime sarve prajñā(va)nto ma(ha)r(s)inaḥ priyadarśa(n)āś ca rūpe-*<sup>[14]</sup> *ṇa kuta eteṣa āgama(h) 3 (=7)*。一方G-N伝本ではD1 <sup>[111a, 103.28]</sup> *dhṛtimantās cīme sarve smṛtimantā maharṣayah* <sup>[1]</sup> <sup>[29]</sup> *priyadarśanāś ca nā rūpeṇa kuta eteṣa āgamaḥ // [7]*; C5 <sup>[96a.5]</sup> *dhṛtimantās c' ime sarva smṛtimanto maharṣayah | priyadarśanāś ca nā rūpeṇa kuta eteṣu* <sup>[96b.1]</sup> *āgamaḥ || (7)* をはじめ、他のG-N伝本でも *smṛtimat-* と読む。

<sup>16</sup> 他の現存写本の異読がなく、すべて *prajñāya* と読む。



でいる。

【妙法華】<sup>[9625]</sup> 我以佛眼觀 <sup>[26]</sup>見六道衆生 貧窮無福慧 <sup>[27]</sup>入生死嶮道 相續苦不斷

この場合では *prajñā* と *punya* 「福德」が並列であり、*prajñā* と *punya* が同格である。同様に *prajñā* と並列で同格の語彙がある用例は以下である：(37) *ṛddhi-* 「神通」、*śruta-* 「学習したこと」；(38) *ārabdhavīrya-* 「精進に励むこと」、*smṛtimat-* 「記憶に留めること」；(48) *punya-*；(49) O(Th) *jñāna-* / KN *ṛddhi-*；(51) *ṛddhimat-*, *puṇyavat-*, *jñānavat-*。

このことから、*prajñā* と同価値な意味をもつ用語は *punya*, *ṛddhi*, *śruta*, *ārabdhavīrya*, *smṛtimat*, *jñāna* であることがわかる。

## 2. ブッダのさとりを得るための思惟(六波羅蜜の一つ)としての *prajñā*

用例(8) O(Th) 56b5 *prajñāya* : KN[2]49.13 *prajñāya*

O(Th)<sup>[56b4]</sup> *ye āsi satvās tahi teṣa saṃmukhī śṛṇvanti dharmam atha vā śrutāvinaḥ* ·  
*datta(m) ca dā-<sup>[5]</sup>nam caritaṃ ca śīlam kṣānti(ś) ca sampādita brahmacaryam* 38  
 (=75)  
*vīrye ca dhyāne ca kṛtādhikārā prajñā-<sup>[6]</sup>ya vā cintita eṣa dharmam*  
*vividhāni puṇyāni kṛtāni yehi te sarvi bodhāya-m-abhūṣi lābhinaḥ* 39 (=76)

そこには、彼らの面前で、法を聞き (+*śṛṇvanti*)、あるいは聞き終えた (+*śrutāvinaḥ*) 生きとし生けるものたちがいて (+*āsan*)、そして、布施 (*dānam*) をなし (+*dattam*)、そして持戒 (*śīlam*) と忍耐が (+*kṣāntimś*) なされていること (*caritaṃ*) や、梵行を (+*brahmacaryam*) 成し遂げている (*sampādita*) (75)。

そして、精進 (*vīrye*) と禪定における (*dhyāne*) 供養がなされ、あるいは *prajñā* によって、これらの教えが思惟され (*cintita*)、さまざまな徳行によって (*puṇyāni kṛtāni*)、彼らすべてはさとりを得るものとなったのであった (76)。

KN<sup>[49.11]</sup> *ye cāpi sattvās tahi teṣa saṃmukhaṃ śṛṇvanti dharmam atha vā śrutāvinaḥ* |  
<sup>[12]</sup> *dānam ca dattam caritaṃ ca śīlam kṣāntyā ca sampādita sarvacaryāḥ* ||75||  
<sup>[13]</sup> *vīrye ca dhyāne ca kṛtādhikārāḥ prajñāya<sup>17</sup> vā cintita eti dharmāḥ* |  
<sup>[14]</sup> *vividhāni puṇyāni kṛtāni yehi te sarvi bodhīya abhūṣi lābhinaḥ* ||76||

そしてまた、そこには、彼らの面前で、法を聞き、あるいは聞き終えた生きとし生けるものたちがいて、そして、布施をなし、そして持戒と忍耐がなされていることや、梵行を成し遂げている (75)。

そして、精進と禪定における供養がなされ、あるいは *prajñā* によって、これらの教えが思惟され、さまざまな徳行によって、彼らすべてはさとりを得るものとなったのであった (76)。

【妙法華】<sup>[8&12]</sup> 若聞法布施 或持戒忍辱 <sup>[13]</sup>精進禪智等 種種修福慧 <sup>[14]</sup>如是諸人等

<sup>17</sup> 当該対応箇所他 SP 写本すべてが *prajñāya* と読む。

皆已成佛道

この用例では以下が示されている：

- 1) 布施・持戒・忍耐・精進・禪定の行法により *prajñā* が形成・蓄積される。
- 2) それらの繰り返しによる行為が構築された（徳行の積み重ねによる）*prajñā* により、布施・持戒・忍耐・精進・禪定の行法の一つひとつを思惟することができる。
- 3) このようなことを為した修行者の結果として、ブツダのさとりを獲得することができる<sup>18</sup>。

上記の用例の他に以下がある。

用例(43) O(Th) 327a4 *prajñāyā* : KN[16]339.10 *prajñāyā*

O(Th) <sup>[327a2]</sup> (\*\*\*) *eva<sup>[m]</sup> dharmaparyā<sup>-[3]</sup>yaṃ dhārayamāno dānena vā sampād(āyet \*\*\* kṣān)tyā vā vīryeṇa vā dhyānebhi<sup>-[4]</sup>r vā prajñāyā vā sampādayet bahutaraṃ puṇyābhisamkāraṃ prasavati aprameya<sup>-[5]</sup>taraṃ asaṃkhyeyataraṃ aparimāṇam aparyantam*

彼は、このような (*evaṃ*) 教説を (*dharmaparyāyaṃ*) 保持し (*dhārayamānaḥ*)、布施によって (*dānena*) 完全に生じさせることができる (*sampādayet*)。彼は [あるいは持戒によって、] 忍耐によって (*kṣāntyā*)、あるいは精進によって (*vīryeṇa*)、あるいは禪定によって (*dhyānebhir*)、あるいは *prajñā* によって完全に生じさせることができる。彼が、より多くの福德の集積 (*puṇyābhisamkāraṃ*) を増大させる (*prasavati*)。いっそう量り知れなく (*aprimeyataraṃ*)、いっそう数えきれず (*asaṃkhyeyataraṃ*)、無量で (*aparimāṇam*)、無限に (*aparyantam*) [増大させる]。

KN <sup>[339.9]</sup> *kaḥ punar vādo 'jita ya imaṃ dharmaparyāyaṃ dhārayan dānena vā sampādayec chīlena vā kṣāntyā vā <sup>[10]</sup>vīryeṇa vā dhyānena vā prajñāyā vā sampādayed bahutaraṃ puṇyābhisamkāraṃ sa kulaputro vā kula<sup>-[11]</sup>duhitā vā prasaved buddhajñānasamvartanīyam aprameyam asaṃkhyeyam aparyantam*

さらにアジタよ、この教説を保持し、布施によって完全に生じさせることができる人、あるいは持戒、あるいは忍耐、あるいは精進、あるいは禪定、あるいは *prajñā* によって完全に生じさせることができる人は誰であれ、良家の息子、あるいは娘は、より多くの福德の集積を増大させることができる。[その人は] ブツダの知を完全に導き (*buddhajñānasamvartanīyam*)、量り知れず、数えきれない、無限に [増大させることができる]。

【妙法華】<sup>[45c14]</sup> 況復有人能持是經。兼行布<sup>[15]</sup>施持戒忍辱精進一心智慧。其徳最勝無量<sup>[16]</sup>無邊。

この用例は、六波羅蜜（布施・持戒・忍耐・精進・禪定・智慧）を行ずることによ

<sup>18</sup> この分類と同様な用例は最多の32用例がある（参照、表1「② ブツダのさとりを得るための思惟（六波羅蜜の一つ）としての *prajñā*」）。

って得られるより多くの福德の集積 (*bahutaram puṇyābhisamkāram*) を増大させることができるといった記述である。現存する CA 伝本には O(Th) のほか FB<sup>19</sup>がある。G-N 伝本のうち D1, K, Pk, C5, N1, A1には CA 伝本 (FB, O(Th)) と同じ読みで *buddhajñāna* 「ブツダの知」の用語が存在しないが、P3 182a4, T8 86b3, R 122a3 +*buddhajñānasamvarttanīya*-とあり KN と同じ読み *buddhajñāna* 「ブツダの知」が存在する。妙法華には当該箇所に対応する漢訳語がない。このことから初期 SP の当該箇所では *buddhajñāna* 「ブツダの知」の用語が存在しなかった可能性がある。伝承過程において、六波羅蜜を行ずることによって得られる福德の集積の結果としての「ブツダの知」を身につけることができ、これによって生きとし生けるものたちを導くことができると解釈されたと考えられる。

この他、同様な用例(2)、(3)では、単に *prajñāpāramita* 「*prajñā*の極致」の用語だけが出現している。また用例(42)、(52)では、六波羅蜜において最後の *prajñāpāramita* が出現している。

### 3. 如来・ブツダの知としての *prajñā*

用例(12) O(Th) 131a7 *tathāgataprajñāyā* : KN[5]132.1 *tathāgatasya jñānaprabhāyā*  
O(Th)<sup>[131a7]</sup> *na ca tathāgataprajñāyā*<sup>[132b1]</sup> *ūnatā vā* ('*tirikatā vā yathā puṇyajñānasamudāgamāya sambhavati* ·

そしてしかも、如来の *prajñā* の光によって、過 ('*tirikatā*) 不足 (*ūnatā*) なく、その結果として福德や *jñāna* を完全に達成することになる。

KN<sup>[132.1]</sup> *na ca*<sup>[2]</sup> *tathāgatasya jñānaprabhāyā ūnatā vā* *tirikatā vā yathā puṇyajñānasamudāgamāya sambhavati* |

そしてしかも、如来の *jñāna* の光には、過不足なく、その結果として福德や *jñāna* を完全に達成することになる。

【妙法華】 ---- (当該箇所に対応用語なし)

*tathāgata* に直接に係る *prajñā* はこの用例だけである。当該箇所について CA 伝本には O(Th) の読みのみが存在し、G-N 伝本には D1 50b, 61.19 *tathāgataprajñāyā*; D4 60b7 *tathāgatapr*(*ajñāyā*); C5 42a4, B 54a5 *tathāgatasya prajñāyā*; C6, T6 *tathāgatasya prajñāyā*; T8 *tathāgatasya samyakprajñāyā*; K, T2 *tathāgatasya jñānatāyā*; A1, R *tathāgatajñāna prabhāyā* となっている。このように、CA 伝本・G-N 伝本の 2 伝本ともにほぼ書写年代順に *tathāgataprajñā* → *tathāgatajñāna* となっていることから、初期の SP の当該箇所

<sup>19</sup> FB<sup>[327a2]</sup> *eva*<sup>[m]</sup> *dharmaparyā-*<sup>[3]</sup>*yaṃ dhārayamāno dānena vā sampād*(*ayet \*\*\* kṣān*)*tyā vā vīryeṇa vā dhyānebhi-*<sup>[4]</sup>*r vā prajñāyā* *vā sampād* *ayet bahutaram puṇyābhisamkāram prasavati aprameya-*<sup>[5]</sup>*taram asaṃkhyeyataram aparimāṇam aparyantam.*

は *tathāgataprajñā* であったことが期待され、伝承過程での書写において *tathāgataprajñā* → *tathāgatajñāna* に書き換えられている可能性が高い。

用例23 O(Th) 176b7 *prajñāvanto* : KN 183.5 *prajñāvanto*

O(Th) <sup>[176b6]</sup> *āścaryaprāptā bhikṣava ime ṣo-<sup>[7]</sup>ḍaśa śrāmaṇerakā adbhutaprāptāḥ prajñāvanto bhikṣava ime ṣoḍaśa śrāmaṇerakā bahubū-<sup>[177a1]</sup>ddhakoṭinayutaśatasahasraparyupāsītā bhikṣava ime ṣoḍaśa śrāmaṇerakā : bahubuddhakoṭinayuta-<sup>[2]</sup>śatasahasracīrṇacaritabrahmacaryā bhikṣava ime ṣoḍaśa śrāmaṇerakā buddhajñā-<sup>[3]</sup>napariḡrāhakā bhikṣava ime ṣoḍaśa śrāmaṇerakā · buddhajñānasamādapakā*

比丘たちよ、稀有なことを得て (*āścaryaprāptā*)、これら16名の沙門たちはありえないことを得て (*adbhutaprāptāḥ*)、***prajñā***を備えている。比丘たちよ、これら16名の沙門たちは何千万×万×百×千のブツダたちを崇拝してきた。比丘たちよ、これら16名の沙門たちは何千万×万×百×千のブツダたちに修行 (*carita*) や梵行を成し遂げている (*cīrṇa*)。比丘たちよ、これら16名の沙門たちはブツダの知を身につけている (*buddhajñānapariḡrāhakā*)。比丘たちよ、これら16名の沙門たちはブツダの知に駆り立てる (*buddhajñānasamādapakā*) のである。

KN <sup>[183.4]</sup> *āśca-<sup>[5]</sup>ryaprāptā bhikṣavo 'dbhutaprāptā ime ṣoḍaśa śrāmaṇerāḥ prajñāvanta<sup>20</sup> bahubuddhakoṭinayutaśatasaha-<sup>[6]</sup>sraparyupāsītāś cīrṇacaritā buddhajñānaparyupāsakā buddhajñānapratigrāhakā buddhajñānāvātārakā <sup>[7]</sup> buddhajñānasamdarśakāḥ |*

比丘たちよ、稀有なことを得て、ありえないことを得た、これら16名の沙門たちは ***prajñā***を備え、何千万×万×百×千のブツダたちを崇拝し、修行を成し遂げ、ブツダの知を崇拝し (*buddhajñānaparyupāsakā*)、ブツダの知を身につけ、ブツダの知に入らせ (*buddhajñānāvātārakā<sup>21</sup>*)、ブツダの知を教えるのである (*buddhajñānasamdarśakāḥ*)。

【妙法華】<sup>[25b11]</sup> 普告大衆。是<sup>[12]</sup>十六菩薩沙彌。甚爲希有。諸根通利智慧明<sup>[13]</sup>了。已曾供養無量千萬億數諸佛。於諸佛<sup>[14]</sup>所常修梵行。受持佛智開示衆生令人<sup>[15]</sup>其中。

この用例では沙門たちが *prajñā* を備えていると同時に、*āścarya*, *adbhuta* を獲得し、*buddhajñāna* 「ブツダの知」を身につけているとある<sup>22</sup>。これと用例(12)を合わせて考えると、あらゆる修行によって身についた「智慧」には *prajñā* が、如来・ブツダの「智慧」には *jñāna* でそれぞれの用語がそれぞれの意味に応じて用いられていることがわかる<sup>23</sup>。

<sup>20</sup> 当該対応箇所その他 SP 現存写本すべてが *prajñāvanto* と読む。

<sup>21</sup> 当該対応箇所その他 SP 現存写本では、すべて *buddhajñāna* と読む。

<sup>22</sup> この用例(23)と同様な用例には(11)、(13)、(16)、(19)、(21)、(31)、(32)がある。

<sup>23</sup> O(Th) 290b1 *ekabuddhajñānam*; KN[4]110.1, [7]186.6, [7]189.9 *tathāgatajñānam*; O(Th) 49a3, KN[2]41.5 .16;[2]42.7 .16 *tathāgatajñānadarśanasamādapanam* など多数の用例が出現する。

#### 4. 神通としての *prajñā*

先に示した用例(1)のほか、代表的なものは以下である。

用例(15) O(Th) 135b3 *ṛddhīm* : KN[5]135.6 *prajñām*

O(Th) <sup>[134b4]</sup> *ka upāya · kiṃ vā śubham karma kṛtvī tīrṣīm ṛddhīm* <sup>[5]</sup> *pratīlabheyam*

方法は何か、あるいはどんなよい行為をなしたら、そのような神通 (*ṛddhīm*) が獲得できるのか。

KN <sup>[135.6]</sup> *ka upāyaḥ kiṃ vā śubham karma kṛtvedṛśīm* **prajñām** <sup>[7]</sup> *pratīlabheya yuṣmākaṃ prasādāc caitān guṇān pratīlabheya ||*

方法は何か、あるいはどんなよい行為をなしたら、そのような **prajñā** を獲得できるのか。あなた方の厚意から、徳行を獲得したいのである。

【妙法華】 ---- (当該箇所に対応用語なし)

この用例でも同様に、当該対応箇所の用語が CA 伝本と G-N 伝本との異読が存在する。伝承の過程で CA 伝本 *ṛddhīm* が G-N 伝本 *prajñā* に、または G-N 伝本 *prajñā* が CA 伝本 *ṛddhīm* に書き換えられたと考えられ、*prajñā* が *ṛddhi* と同様な意味に解釈されていた可能性があるが、CA 伝本のうち O(Th) 以外は欠損しているため、判断不能である<sup>24</sup>。

なお、上記のように現存 SP 写本のうち CA 伝本 *ṛddhīm* / G-N 伝本 *prajñām* が交換されている用例はこの(15)だけである。

用例(37) O(Th) 297a7 *prajñāya* : KN[14]309.15 *prajñāya*

O(Th) <sup>[297a6]</sup> *ye bodhisattvā i-<sup>[7]</sup>(mi) aprameyā acintikā yeṣa pramāṇa nāsti: ||*

(*ṛddhīya*) **prajñāya** *śruter upetā* <sup>[297b1]</sup> (*ba*) *hukalpakoṭī caritās ca jñāne · (1) (=37)*

KN <sup>[309.14]</sup> *ye bodhisattvā imi aprameyā acintiyā yeṣa pramāṇu nāsti |*

<sup>[15]</sup> *ṛddhīya* **prajñāya** *śruten' upetā bahukalpakoṭīcaritās ca jñāne ||37||*

これら菩薩たちは量り知れない、考えにも及ばない、その量は知られない人々で、神通 (*ṛddhīya*) · **prajñā** · 学習 (*śruter*) を備えたものたちで、知について、何千万の劫の間の (*bahukalpakoṭī*) 修行をしたものたちである。

【妙法華】 <sup>[41b12]</sup> 阿逸汝當知 是諸大菩薩 <sup>[13]</sup> 從無數劫來 修習佛智慧

O(Th) と KN とともに *ṛddhīya prajñāya* であり、並列されていて、両語は同格である。現存する SP 写本のうちで CA 伝本には Lü A13V.8 (*ṛddhīya prajñāya*; FB 34b1 *ṛddhīya prajñāya*; Khā Frag.73r6 *ṛddhīya (praj)ñāya* であり、G-N 伝本にはすべて *ṛddhīya prajñāya* で与えられていることから、当該箇所ではすべての写本で *prajñā* と *ṛddhi* が同格であり、同価値の意味をもつと考えられる<sup>25</sup>。

<sup>24</sup> 現存する当該対応箇所の G-N 伝本すべてが *prajñām* と読むのに対し、CA 伝本のうち O(Th) だけが存在し *ṛddhīm* と読む。

## おわりに

SPにおける *prajñā* と妙法華における漢訳対照箇所全用例は52である。これらの用例には *prajñā* が示す語義として、次の4つに分類できる：①徳相、②ブツダのさとりを得るための思惟、③如来・ブツダの知、④神通。

①では、1) *prajñā* との複合語 (*bahuvrīhi*)、2) *prajñāvat* で与えられる、3) *prajñā* との並列で同格、といったそれぞれの場合が散見される。本稿第1章で議論したように、この場合は、数多くの *prajñā* と同価値の意味をもつ用語となると考えられるが、その中の代表的なものは以下である：1) *kṣīṇāsra* 「漏が尽き」、*vaśībhūta* 「自制者」など；2) *ṛddhimat* 「神通を備えた」、*smṛtimat-* 「記憶に留めること」；3) *punya* 「福德」、*ṛddhi* 「神通」、*śruta* 「(ブツダのさとりを) 学習した」など。

②では、五波羅蜜（布施・持戒・忍耐・精進・禪定）を行じることで得られる *prajñā* によって思惟し、これを繰り返した結果、ブツダのさとりが得られると示される。

③では、SPが伝承されるにしたがって書写年代順に *tathāgataprajñā* → *tathāgatajñāna* と書き換えられている。このことは、如来・ブツダそのものが身につけていることを意味するとされる *jñāna* と、あらゆる修行によって身につけたことを意味するとされる *prajñā* と、2つの用語がそれぞれの場合・状況に応じてその表現を使い分けていることがわかる。

④では、*prajñā* が *ṛddhi* と同価値の意味をもつと示される。

以上のことから、SPにおける *prajñā* が示すものは、如来・ブツダのさとりを得るためになした、あらゆる修行（五波羅蜜によって得られる福德の集積に基づいた思惟の行為や、この行為の集積によって身についた神通の能力）の結果ということになる。

SPに出現する√*jñā-*の名詞派生語は、*saṃjñā-*、*prajñā-*、*abhijñā-*、*vijñā-*、*jñāta-*、*jñāna-*である。SPにおけるこれらの用語の意味はそれぞれ、*saṃjñā-*が「識」、*abhijñā-*が「神通」（超自然的な知）、*vijñā-*が「識別」、*jñāta-*が「既知」、*jñāna-*が「知」といった漢訳語が与えられることが多い。このうちSPにおける *jñāna-* については、用例(12)のように初期のSPの当該箇所が *tathāgataprajñā* であったのが伝承過程において *tathāgatajñāna* と書き換えられた可能性が高い。このことから、五波羅蜜によって得られた福德の集積による *prajñā* と如来・ブツダたちがさとり得た *jñāna* について、「智慧」や「知」の種類を *prajñā* と *jñāna* でそれぞれの意味に応じてそれぞれの用語によって表現を区別し適用していることが考えられる<sup>25</sup>。

以上のことは、バウツダコーシャ研究会「*prajñā* / *paññā* の訳語をめぐって」による

<sup>25</sup> このほかに用例(37)と同様な用例に(36)、(41)、(47)、(49)、(51)がある。

<sup>26</sup> SPにおける *jñāna* については辛嶋[1993]を参考にされたい。



「ヴェーダ文献の *prajñā*」(知覚対象を単に判断するだけではなく、既に得た言葉／知識／経験から、当面する事柄が、どのような経緯を経て如何なる結果になるかを、予め想定(洞察)し、それを解決する能力に関わる「理解」)、および「パーリ文献の *paññā*」(何らかの認識対象に関する専門知や豊富な経験・練度を踏まえ、その対象の背後にある来歴・本質等がはっきりとわかる、という意味での認識)の意味をSPにおける *prajñā* も踏襲する語義であることがわかる。

すなわち、SPにおける *prajñā* はすべての用例から、五波羅蜜による福德の集積に基づいた多くの経験知、つまり「洞察」を意味する。この経験知 (*prajñā*) の集積・総和こそが、「如来・ブツダの知」(*jñāna*) に他ならないと解釈できるであろう。

### 梵文法華經写本一覽 (書写年代・略号・出土地・所蔵場所)

以下の SP 写本の詳細は SMSR[1986: (63)-(78)] を参考にした。

伝本	書写年代	写本の略号	書写年	出土地	所蔵場所
Central Asian	古年代	Lü	5-6世紀半ば	Turfan, Khotan, etc.	The Lüshun Museum. Peking.
		M	≐ Lü		Note of Dutt's edition.
		FB	6世紀	Farhād-Bēg.	India Office Library. London.
		Khā	(不明)	Khādaliq, Khotan and Turfan.	The Berlin State Library, the Deutsches Museum and the British Library.
		F1		Kashgar.	The Russian Academy of Science. Leningrad.
		F2		Khādaliq.	India Office Library. London.
		F3		Domoko and Khādaliq.	India Office Library. London.
		F4		Khādaliq.	India Office Library. London.
		F5		Unknown.	India Office Library. London.
	F6	Kashgar.		India Office Library. London.	
新年代	O	9-10世紀		Khādaliq.	The Russian Academy of Science, the Berlin State Library, the Deutsches Museum and the British Library.
Gilgit-Nepal	古年代	D1	6-7世紀	Gilgit	National Archives of India. New Delhi.
		D2a			
		D2b			
		D3a			
		D3b			
		D4			The Sir Pratap Singh Museum. Srinagar.



	中年代	<b>K</b>	1069-1070年	Nepal	Kawaguchi, E.'s manuscript. Toyo Bunko. Tokyo.
		<b>Pk</b>	1082年		No. 0004. Library of the Cultural Palace of the Nationalities. Beijing.
		<b>C1</b>	(不 明)		Add. 1032. The Cambridge University Library. Cambridge.
		<b>C2</b>	(不 明)		Add. 1324. The Cambridge University Library. Cambridge.
		<b>C3</b>	10-11世紀		Add. 1682. The Cambridge University Library. Cambridge.
		<b>C4</b>	1039年		Add. 1683. The Cambridge University Library. Cambridge.
		<b>C5</b>	1064-1065年		Add. 1684. The Cambridge University Library. Cambridge.
		<b>C6</b>	1091-1092年 /1685-1686年		Add. 2197. The Cambridge University Library. Cambridge.
		<b>C7</b>	1066年		= C6 <i>a</i>
		<b>B</b>	11-12世紀		Or. 2204. British Library. London.
		<b>T1</b>	(不 明)		No. 102(1), University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>T2</b>	11世紀		No. 408. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>T5</b>	(不 明)		No. 411. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>T6</b>	11世紀		No. 412. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>T7</b>			No. 413. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>N1</b>	1151年		No. 4/21. National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū.
		<b>N2</b>	(不 明)		No. 3/622. National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū.
		<b>N3</b>			No. 5/144. National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū.
	<b>N4</b>	No. 3/737. National Archives of Nepal, Kāṭhmāṇḍū.			
	<b>N5</b>	= N1			
	<b>A1</b>	1680-1681年		No. G4079. Asiatic Society, Calcutta.	
	新年代	<b>A2</b>	1713-1714年	No. G4199. Asiatic Society, Calcutta.	
		<b>A3</b>	(不 明)	No. B7. Asiatic Society, Calcutta.	
		<b>R</b>	1803-1804年	The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. London.	

		<b>T3</b>	19世紀		No. 409. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>T4</b>	1807-1808年		No. 410. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>T8</b>	17-18世紀		No. 414. University of Tokyo Library. Tokyo.
		<b>P1</b>	19世紀		No. 138-139. Bibliothèque Nationale. Paris.
		<b>P2</b>	1826年		No. 140-141. Bibliothèque Nationale. Paris.
		<b>P3</b>	19世紀		No. 2. Société Asiatique. Paris.
		<b>Af</b>	15-16世紀	Afganistan	The Schøyen Collection.

※ このほか梵文法華經写本ローマ字転写校訂本・写本混淆校訂本の略号・出典については以下を参照：Nishi, Yasutomo. A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra. <https://www.cari-saddharmapundarika.com/sp-1>.

## 出典・参考文献

- (1) 『大正新脩大藏經』 第9巻、No.262：1-62.
- (2) Edgerton[1953]：Edgerton, F. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary and Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, Motilal Banarsidass Publishers, Delhi.
- (3) 辻[1970]：辻直四郎. 1970. 「法華經の言語」(金倉圓照編『法華經の成立と展開』). 平楽寺書店：3-21.
- (4) O: Ed. Chandra, L. 1976. *SADDHARMA-PUNḌARĪKA-SŪTRA Kashgar Manuscript. Śata-pitaka Series 229*. Tokyo. Rpt. The Reiyukai. 1977.
- (5) 戸田[1977-2002]：Ed. Kotsuki, H. with the collaboration of Mizufune, N. “A Concordance of Romanized Texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra Manuscripts Transliterated by Prof. Hirofumi Toda in Reference to Kern-Nanjio’s Edition 2002” in private edition.
- (6) 中村瑞隆ら[1977-1986]：中村瑞隆監修・塚本啓祥・田賀龍彦・久留宮圓秀・伊藤瑞叡・三友健容編. 1977-1986. 『梵文法華經写本集成』 第1-15巻、梵文法華經刊行会.
- (7) Th: Ed. Toda, H. 1983. *Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Central Asian Manuscripts. Romanized Text*. Tokushima.
- (8) 塚本啓祥ら[1986-1988]：塚本啓祥・田賀龍彦・三友量順・山崎守一編『梵文法華經写本集成ローマ字本・索引』 第1-2巻. 梵文法華經刊行会刊. (=SMSR[1986].)
- (9) 辛嶋[1993]：辛嶋静志. 1993. 「法華經における乗 (yāna) と智慧 (jñāna) — 大乘仏教におけるyānaの概念の起源について —」. 田賀龍彦編『法華經の受容と展開』. 平楽寺書店：137-197.

- (10) 高崎 [2000] : 高崎直道. 2000. 「仏教の智慧 般若」(鶴見大学仏教文化研究所公開講演会)、鶴見大学仏教文化研究所紀要(5) : 1-32.
- (11) 橋本[2007] : 橋本哲夫. 「パーリ語經典韻文中の「智慧 (paññā)」について - paññā はつねに「智慧」か? -」. 日本仏教学会年報(73) : 43-54.
- (12) 西[2011] : 西康友. 2011. 「法華經における根本的概念」. 『大正大学大学院研究論集』第35号 : 92-95.
- (13) Nishi[2016] : NISHI Yasutomo. 2016. “On the Skilful Means in Saddharmapuṇḍarīka: Centered on Chapter II.” In Mitomo Kenyo. ‘Guiding Lights’ for the ‘Perfect Nature.’ : *Studies on the Nature and the Development of Abhidharma Buddhism A Commemorative Volume in Honor of Prof. Dr. Kenyo Mitomo for his 70th Birthday*. Tokyo: (469)494-(507)456.
- (14) Ishida, C. 2016. “A Historical Overview of the Discovery and Study *Saddharmapuṇḍarīka* Manuscripts.” In Mitomo 2016: (471)492-(507)456.
- (15) 『仏教文化研究論集』第18・19号(特別号) [2017] : 『仏教文化研究論集』第18・19号(特別号). 東京大学仏教青年会. 2017.
- (16) Nishi[2019] : NISHI Yasutomo. 2019. *Saddharmapuṇḍarīka, Central Asian (Kashgar Manuscript) and Gilgit-Nepalese (Kern-Nanjio’s Edition) Recensions of Transcription in Roman Script, Word Index, Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 1*. Chuo Academic Research Institute.
- (17) Mochizuki and Kim[2020] : MOCHIZUKI Kaie and KIM Byungkon. 2020. *Bibliography of the Studies on the Saddharmapuṇḍarīkasūtra (1844-2020)*. *Lotus Sutra Studies I. The International Institute for Nichiren Buddhism of Minobusan University*.
- (18) 西 [2020] : 西康友. 2020. 「IT 言語解析を活用した梵文法華經写本と漢訳法華經の対照研究の推進」. 『中央学術研究所紀要』第49号(本紀要).

